Global Hydrodynamics Lab

(Yamazaki Lab @ IIS U-Tokvo)

https://global-hydrodynamics.github.io/

Welcome!

Global Hydrodynamics Lab (PI: Dai Yamazaki) is a part of

Global Hydrology Group in Institute of Industrial Science, The University of Tokyo. Yamazaki lab is in U-Tokyo Komaba-2 Research Campus in central Tokyo. Our studies mainly focus on the dynamics of land waters on the global scale, using modelling, remote sensing, and data integration approach.

What is Global Hydrodynamics?

"Global Hydrodynamics" is the study of the dynamics of terrestrial waters over the entire Earth.

It focuses on the movement and storage of the surface and sub-surface waters at multiple temporal and spatial scales from local to global, including rivers, lakes, wetland, soil moisture, and groundwater. It also covers their interactions with related earth surface processes, such as precipitation, evaporation, coastal and ocean dynamics, biogeochemistry, and climate change.

We extensively use modelling, remote sensing, and data integration approaches to cover the entire globe, while we also respect in-situ observations to determine important processes in global hydrodynamics and to ensure the robustness of the model conceptualization. In addition to natural hydrological cycle, we also assess the impact of the terrestrial water variability to the human well-beings (e.g. flood, water resources, ecosystem service), and try to understand the reactions of the society (i.e. water resources and hazard management) and their feedback to the global hydrodynamic system.

Global River Hydrodynamics model CaMa-Flood

lution River Network Mag

Sub-grid channel/floo



Global river topography data MERIT Hydro

Our lab is one of the world-leading hydrological science bridgeheads, consisting of researchers and students with multiple backgrounds (Earth science, civil engineering, geography, spatial information science, computational science, etc.)

Coarse-resc

All research staff members belong to Institute of Industrial Science, while we also commit to education in the Department of Civil Engineering (Grad School of Engineering) and in the Graduate Program of Environmental Sciences (Grad School of Arts and Sciences).

How to join us?

We are always looking for new group members with passion, talent and grit. If you love nature and the Earth and want to understand them with data and model, please join us! You will have the chance to work on frontier science challenges on global hydrodynamics, combining the model, remote sensing and data integration approach. We are happy to work with you to understand, describe and predict the dynamics of land waters across various spatial and temporal scales.

If you are interested in, please contact us by email (yamadai [at] iis.u-tokyo.ac.jp). We are happy to chat about potential research projects and research life in our group.



Our working space in Komaba-2 campus

Contact: Yamazaki Lab (IIS Be605) 4-6-1 Komaba, Meguro-Ku Tokvo, 153-8505, Japan







Yamazaki lab Webpage 回游 https://global-hydrodynamics.github.io/



Stuff & Ph.D. Students as of 2023 June

Global Hydrodynamics Lab @ IIS U-Tokyo PI: Dai Yamazaki yamadai [at] iis.u-tokyo.ac.jp



東京大学 生産技術研究所















































<u>凸凹だらけの地形データを磨く</u>

今日の降水確率は10%、平均気温は14℃。1884年に東京気象台から 日本初の天気予報が発表されてから、はや136年。降水の有無の適中率は 85%を超えます。実は天気予報も気候変動予測も、高精度な予測には精密 な地形データが必要です。しかし、世界ではさまざまな団体が多様な手法 で地形を観測しており、地域ごとに精密さはまちまちです。

山崎大准教授は、地形データから複数の誤差成分を自動で取り除くプロ グラムを世界で初めて作りました。衛星観測情報や世界各地の自治体が 持つデータなど、あらゆるデータを集め、磨き、地球全域を対象とした世界 最高精度の標高と河川地形のデータを、Google Earth Engineに提供して います。誰でもデータを使えるため、3,000を超える研究機関から相談が 殺到。磨かれた地形データは、最先端研究と今後の暮らしを支える、陰の 立役者なのです。

東京大学 **Global Hydrology Group**

東京大学Global Hydrology Group (GHG)は、ローカルからグローバルまでの多様 な時空間スケールで「水文学」の幅広い要素を扱う、東京大学の先端的研究 基盤です。

東京大学内の様々な組織(生産技術研究所、工学系研究科・社会基盤学 專攻、新領域創成科学研究科、大気海洋研究所、総合文化研究科·国際 環境学コースなど)にまたがる研究グループで、地球水循環に関わる幅広い研究 と教育に取り組んでいます。



Our Mission

自然環境と人間社会において不可欠な資源である地球上の水について理解を深めること は、気候変動や洪水・干ばつなど水に関わる様々な課題を解決する上で重要です。 Global Hydrology Groupでは「水に関する学問の継承発展と社会への貢献」を使命に掲げ、 水循環・水資源とそれらの人間活動との相互作用に関する最先端の研究を行っています。

Research Interest

ローカルからグルーバルまでの多様な時空間スケールで幅広い領域にまたがる「水文学」の 研究を実施しています。



動しているのか?



がどのような形態で存在し、そ れらが季節的・長期的にどう変 気候変動の影響は? 観測やデータ解析で捉えます。



• 地球水循環と社会 < 循環と気候システムや人間社

洪水暴露人口

持続可能な社会を構築できる b
球視様課題に対処するための 解決策を探ります。





Member

苦村 圭 教授



山崎大 准教授

生産技術研究所(駒場)

Glebal Hydrêlogy Grëup

沖大幹 教授 工学系・社会基盤学専攻(本郷)

生産技術研究所(柏)



沖一雄 特仟教授 生産技術研究所(駒場)

木口 雅司 上席研究員

工学系・社会基盤学専攻(本郷)

工学系・社会基盤学専攻(本郷)





生産技術研究所(柏)







新田友子 特任講師 生産技術研究所(柏)

Global Hydrology Groupは東京大学の3キャンパスに拠点があります。 芳村研究室(柏)、山崎研究室(駒場)、沖研究室(本郷)で参加方法が異なるので、 詳しい情報は各研究室のWeb Pageを見てください。

生産技術研究所(駒場

同位体水文気象学研究室(芳村研究室:柏キャンパス)

芳村研究室では、水循環システムの理解や気候予測、そして水災害の抑止に貢献する研究に 取り組んでいます。主な手法は地上及び衛星観測と水循環モデリング、そして両者を融合する -タ同化です。特に水同位体比情報を用いたグローバルな水循環研究や、地球システムモデ ル用の陸域モデルの開発で世界をリードする成果を出しています。近年では、機械学習による気 象予測や古気候復元など、幅広いトピックも扱っています。

全球陸域水動態研究室(山崎研究室:駒場2キャンパス)

山崎研究室は、河川・湖沼・湿地・地下水など陸域のあらゆる水の動態が研究対象で、モデリ ング・衛星観測・データ分析を主な研究ツールとしています。 グローバルな河川モデルによる水動 態シミュレーションで世界をリードしており、気候モデル開発・気候変動影響評価・衛星水循環モ ニタリングにも取り組んでいます。陸域水動態モデリングの世界的研究拠点で、海外からの学 生・スタッフ・ビジターも多数集まる国際的な研究室です。

地球人間圏研究室(沖研究室:本郷キャンパス)

私たちの研究室では、自然と人間社会の基本原理の総合的な理解のために研究を行っていま 水に関する学問の継承と社会への普及を社会的使命として掲げており、河川水文学、地 **す**. 9。かに肉ッタナー同の総単に社会、ツー及を社会の実際にして有りてのラ、ガーバスナ、地 球規模水構置システム科学、世界ならびに日本の水問題解決に関する研究に取り組んでいま す。さらに水を対象とした研究だけでなく、社会科学や経済学、心理学などさまざまな学問を駆 使し、社会に大きく貢献するもの、長期的に有用・有意義なもの、新たな学問体系の構築に資 するものを幅広く研究対象としています。多様な人材を包摂し、様々な分野で世界最先端の研 究開発に触れることが可能な研究室です。





外大学教授を招いたセ

グローバル水文学グループWebページ http://hydro.iis.u-tokyo.ac.jp



水循環

グロ・ -バル水文 気候変動

Research Topic

迫ります

各研究室ごとに様々な最先端の研究テーマを扱っています。



水同位体を用いた水循環解析



0

気候変動影響と洪水リスク評価

行っています。



GHGに参加するには?









高精度・高効率な全球河川水動態モデルの開発 CaMa-Flood: Global river hydrodynamics model



地球規模で河川の流れを理解する

地球規模での河川流れのシミュレーションを実現することが、 気候予測の精緻化や災害リスク評価にとって重要です



河川は、大気・海洋・陸域をめぐる地球水循環の重要な要素です。 ・陸域から海洋への淡水や栄養塩の輸送 ・河川とつながる湖沼や湿地におけるCO2やメタンなどの物質循環 など通して、地球の気候システムに影響を与えています。 気候システムの一要素としての河川の役割を理解するには、 地球上すべての河川を対象としたモデリングが必須です。

> また、河川流況に関連する洪水や渇水などの自然災害は、 世界各地で毎年のように発生しています。 いつどこで発生するか分からない災害に備えるには、 広域を対象としたモニタリングと予測が必要です。

World Natural Catastrophes, 2019



全球河川モデルでは、詳細な水動態をどうやって広域で効率よく計算するかが課題です





アマゾンやメコンなどの大陸河川では、 ・数1000kmスケールの河川流域の水収支 ・数mスケールの地形に規定される水動態 という異なる空間スケールに跨る現象を 同時に考慮する必要があります。

個々の河川を対象にした流域規模モデルでは 高解像度格子を用いることで、詳細な水動態 を記述することが可能です。 しかし、全球河川モデルで高解像度格子を 用いることは現実的ではありません



域氾重モデルLISFLOOD-FPによる10m無像度の決水計算

山崎研究室では、リアルタイム洪水予測や気候モデルとの結合といった先端的研究のために 地球全域を対象に高精度・高効率で河川の水動態を計算できるモデル開発に取り組んでいます

全球河川水動態モデルCaMa-Floodにおける工夫とその利点

Amazonian Floodplains

サブグリッド地形表現による複雑な水動態の近似



振舞量素の再進票で上読から下読への水の読れを計算
 サブグリッド海豚パラメータによる再進と22重素の送録
 ・低解像度の河道網に沿って水収支を計算

・氾濫原の水動態は、水位はー様と仮定して地形情報から近似 というアプローチをとることで、大陸河川の流れを効率よく表現した。

衛星データから現実的な地形パラメータの同定



高解像度の河川地形データに、河川地形解析アルゴリズムFLOWを 適用することで、低解像度の河道網・単位集水域・氾濫原地形など の地形パラメータを抽出する。

市水量-水位-浸水域の関係を実地形をもとに定めることで、
全球モデルの枠組みで水位や浸水域の高精度計算が可能になった。

従来の全球河川モデルと比較して、大幅に河川水動態の表現が改善







氾濫原浸水と浅水波方程式の導入で 従来モデルより流量と水位が現実的に サブグリッド地形情報を活用することで、低解像度 シミュレーションを診断的にダウンスケールできる

高精度・高効率の河川シミュレーションにより多様な応用研究が実現



地球全域を対象に高精細な洪水ハザードマップを整備



広域での洪水リアルタイム予測システム



気候予測の不確実性を考慮した将来の洪水リスク推計



陸域モデルの一部として気候モデルと結合

機械学習による衛星降水量推定 ML-based Satellite precipitation estimate



人工衛星を用いた全球降水観測

降水は水循環・水資源や災害管理において重要な役割を担っており、正確な観測が必要です 気象レーダーの設置地域は限定的であり、**人工衛星による全球降水観測**が期待されています

The global weather radar coverage



雨量計・気象レーダーは設置が難し い地域があったり、設置・維持にコ ストが発生する為、未だに全球の正 確な降水量は把握できていません

Global Precipitation Measurement



出力(降水量)

日米を中心とした国際協力の下で進 められている全球降水観測計画 (GPM計画)では、世界各国の複数の 衛星が連携して、地球の雨や雪を観 測しています

衛星観測値を地上降水量へ変換するアルゴリズムはまだ研究段階であり、 近年はその複雑な関係性を捉えるために、機械学習を用いた手法が数多く提案されています

機械学習モデル





雲微物理の降水過程に基づいたニューラルネットワーク設計

全球降水量推定に向けた 新たなニューラルネットワークの提案

全球降水観測計画(GPM)における新たな降水量推定アルゴリズムを提 案しました

降水量推定に適したニューラルネットワークを設計することで、 従来型のニューラルネットワークと比較し、同じ入力データにも関 わらず高い推定精度を達成しました

ネットワーク設計



従来型モデル(Single-task)と提案モデル(Two-task)のパフォーマンス比較 統計指標(RMSE, Area, CC)とScatter-density plotにより2つのアルゴリズムを比較

Global Hydrology Group / Kim + Yamazaki Lab

気象モデルと衛星観測データを組み合わせた 降水量推定モデル

静止軌道衛星から取得できる高い時空間解像度のデータを用いた 降水量の推定アルゴリズムを提案しました 衛星から取得できる赤外バンドに加えて、気象モデル(ERA5)によ る雲水データを利用しています 雲水データの情報を効果的に学習できるネットワークを設計し、 単純な入力データを追加したモデルより高い精度を実現しました 損失関数 ag min Laug(Precpue, Precpue, RailMaakkas, RainMaskas, CloudWateras, CloudWateras)

$$\begin{split} & \underset{w_{int}}{\text{min}} (\textit{rec}p_{\textit{obs}},\textit{rec}p_{\textit{obs}},\textit{rec}p_{\textit{obs}},\textit{rec}p_{\textit{obs}},\textit{rec}p_{\textit{obs}},\textit{rec}p_{\textit{obs}},\textit{rec}p_{\textit{obs}},\textit{clouwv ater}_{\textit{obs}},\textit{clouwv ater}_{\textit{obs}},\textit{clouwv ater}_{\textit{obs}}) \\ & L_{mix} = w_1 * \textit{Loss}_{SEE}(\textit{Precp}_{\textit{obs}},\textit{Prec}p_{\textit{obs}},\textit{Prec}p_{\textit{obs}},\textit{els}) \\ & Loss_{SGE} = \frac{1}{N} \sum_{i}^{N} (y_i - \hat{y}_i)^2 \\ & Loss_{BCE} = -\sum_{i}^{N} y_i \log \hat{y} \end{split}{0.5in}$$





http://hydro.iis.u-tokyo.ac.jp/

Understanding the Substantial Impact of Levees on River Hydrodynamics 河川水動態に堤防が与える影響

River hydrodynamics change after levee construction

Levees play a crucial role as important infrastructures to mitigate flood hazards worldwide. Over time, the number and standard of levees have been continuously improving to meet the needs of society. However, previous studies have revealed that levee changes river hydrodynamics and flood risk, not only at the levee location but also at its upstream and downstream.



Fig. 1: (a) The levees in New Orleans and (b) the flooding caused by the breach of these levees during Hurricane Katrina.



Fig. 2 The change of rating curve (water leveldischarge relationship) after levee constructing



Gang Zhao Dai Yamazaki Xudong Zhou

Fig. 3 CaMa-Flood two additional parameters for levee module (we need levfrc and levhgt)

Current global flood models (GFMs) have yet to incorporate these levee-induced hydrodynamic alterations, largely due to the challenges presented by the sparse levee data worldwide and the complexity of integrating such process into GFM structures.

Introducing the New Levee Module in the CaMa-Flood River Hydrodynamic Model



Fig. 4 Levee parameters in the US (a) Levee fraction (levfrc): (b) Levee height (levhgt): These two parameters are derived from the National Levee Database of US

----- Module Structure- -----



Fig. 5 Calculation of flood stage using the levee module in the CaMaflood



Fig. 6. Simulations from the CAMA-Flood model for a station downstream of the Mississippi River, showing (a) discharge and (b) water surface level (WSL) under two scenarios - considering and not considering the presence of levees.

How Levees Influence river hydrodynamics across the US



Fig. 7. Annual flood stage (a) and flood discharge (b) variations after the levee construction.

We employ the US to demonstrate our model owing to its rich observational data. Currently, we've developed a method for estimating levee parameters on a global scale. This method can assist in understanding the influence of levees on flood hazards and risks in data-sparse regions worldwide.

(Email: gangzhao@rainbow.iis.u-tokyo.ac.jp)

https://global-hydrodynamics.github.io/

金融界で進む気候変動対応 - 気候・災害モデルが果たす役割 -

金融界の現状・課題

企業や投資家など金融界で、気候変動リスクの管理を目指す動きが加速しています

2008年のリーマンショックを機に、ESG分野が経済にもたらすリスクが注目され 始め、2015年のパリ協定を経て、特に気候変動リスク対応の重要性が年々増 しています。ESG投資が拡大し、地域や企業の気候変動適応にも新しい資金 が拠出されるようになるとともに、グリーンボンドやインパクト投資、サステナビ リティ・リンク・ローンなど新しい金融手法も次々に登場しています。 また、世界各国の中央銀行では、気候ストレステストが実施され始めています。





京都議定書前後の動き

パリ協定前後の動き

気候変動リスク算定手法の開発や効果的な制度枠組みの整備が課題になっています

最近では、TCFD(気候関連財務情報開示タスクフォース)が提示している枠組みなどを中心に、企業は自身が気候変動に与える影響や、直面する気候変動関連リスクについてより一層の透明性が求められています。金融界では特に以下の2種類のリスクに注目しています。

・物理的リスク:洪水や台風、極端気象などの急性リスク・長期の温度上昇などの慢性リスク ・移行リスク:炭素税政策や消費者選好の変化など脱炭素社会へ移行する際に伴うリスク

しかし、企業の立地や業種に応じた、物理リスクと移行リスクの算定するのは難しく、災害シ ミュレーションモデルや気候モデルと経済・金融影響を結びつける方法の発展が重要となっ ています。各国間や大企業と中小企業の間で、より公平かつ効果的に気候変動対策を進め るための制度的枠組みを整備することも課題となっています。



東京大学グローバル水文学グループが果たす役割

グローバル水文学グループの成果は金融界における気候変動対応に活かされています



Global Hydrology Group / Yamazaki Lab

全球河川土砂・栄養塩モデリング



Global River Model with Sediment and Nutrient Transport

河川は淡水だけでなく、大量の土砂・栄養塩を輸送している

河川由来の土砂・栄養塩は海洋循環・海洋生態系に大きな影響を及ぼしています. 全球の河川から流出する土砂は海洋に堆積するだけでなく、栄養塩も輸送します.その栄養塩は海洋を循環するため全球で 大きな影響を与えます.さらに、海洋生態系の変化は将来の気候変動にも影響します.

全球河川土砂・栄養塩動態モデルにより、河川からの土砂・栄養塩流出機構を理解し、海洋 への影響を評価できると期待されます.

海洋モデルとのカップリングによる 海洋での土砂動態の解明 人間生活の依存度の高い 沿岸海洋モデルのデータの高解像度化 気候予測の高度化

河川の土砂・栄養塩輸送を定量的に評価し、全球での物質収支を把握する必要がありますが、 その手段である河川での土砂・栄養塩輸送の全球モデルは発展途上です.

全球栄養塩輸送モデル Huang et al.,2021

DINの再現結果



DINの観測値と計算値

全球土砂・栄養塩輸送モデル構築の課題

- ・ 左図に示すモデルでは、全球で栄養塩輸送を再現していますが、
 時間解像度が低いです。(年平均値)
- 流域の土砂流入量は、降水・傾斜・土壌・土地利用等から推定しますが、 全球でそれらのデータ整備は不十分です。
- さらに、土砂フラックス推定に必要な河川の流速、水深を計算できる 全球モデルはほとんど存在しません。

全球河川土砂動態のモデリングとリモートセンシングの融合

全球河川土砂動態モデル 土砂動態のリモートセンシング CaMa-Sediment 衛星による河川土砂濃度の推定 Orinoco川での適用例 赤色光の水面反射率 全球陸域モデルILS(Nitta et al., 2020)に組 み込むことで、CaMa-Floodの全球 での水深・流速を利用して土砂輸送 表層浮遊土砂濃度 の物理プロセスの詳細を表現する と相関がある Gallav et al., 2019 (Hatono and Yoshimura, 2020) モデルの開発に成功しました. 0,040 0,060 face reflectance (sr⁻¹) アメリカでの河川の色の測定 (2)全球での再現結果 (1)アマゾン川での周年変動 Modal color (~true RGB color Gardner e 反射率と土砂濃度の 関係は流域ごとに異 なるが、例えば河川 の色の時空間分布は 測定可能である. 0.0 0.1 0.2 0.3 0.4 0.5 0.6 0.7 0.8 Correlation Coefficient 青がシミュレーション・白丸が観測値 🔶 高頻度・広範囲のモニタリング 📥 時空間的に整合性の取れた推定が可能 ▶季節変動・空間分布を捉えられる ■ 再現できない物理現象およびデータの誤差に起因 - 反射率と土砂濃度の関係にばらつき する不確実性 土砂フラックスは求められない リモートセンシングから推定した季節変動でモデルを拘束することで, 時空間的に連続な全球河川土砂動態の解明ができると考えられます

Global Hydrology Group / Yamazaki Lab

衛星観測を用いた河川流量の空間変化の推定 Estimation of spatial discharge change from satellite



現地観測に頼らずに河川流量の変化を知ることはできるのか?

効率的な水資源管理のためには,河川流量の空間変化をモニタリングすることが重要です



河川を人間が利用しやすいように改変することで (図1のオレンジ部分),河川の流量・水質・形状は 自然な状態から変化します.

例1:発電・灌漑・洪水制御のためのダム・堤防の 建設により、河川の流量や流路が変化 例2:農業・産業・生活取水により流量が減少

一方で、河川の状態(図10白・水色矢印)が変化 すると、人間の生活にも様々な影響が生じます。 例1:少雨による流量減少で水不足が発生 例2:都市化による流出速度の増加により洪水の 被害が増大



多くの地域では河川が主な取水源(図2の青色部分)となって いるため、その管理は人間生活にとって極めて重要です.

人間活動による水資源量の変化を地球規模でどのように正確に把握するかが課題となっています





得られますが、途上国や自然環境の厳しい地域では 設置が難しく、流況の把握が困難です(図3). このような未観測流域を含む全球規模の水資源量の 推定には、人間活動を含む全球水資源モデルが利用 されています(図4).より正確な推定のためには、現実 の観測情報を用いてモデルのパラメータや推定値を 補正する必要があります。しかし、 ◆ 流量を含む水文観測情報の不足 ◆ モデル・観測の融合スキームの複雑さ が原因で、観測情報の考慮は限定的となっています。

正確な河川に関する情報は流量の現地観測所から

このような空間的制約を解決する手段として,世界中どこでも観測できる衛星の活用が進んでいます. そこで,衛星観測データを用いて,流量の変化をどれほど把握できるのか検証してみました.

衛星観測から人間活動が河川流量の空間変化に与えるを影響を推定

<u>手法·理論</u>

黄河主流を対象に、4010枚のLandsat画像から668の連続した 河道(中央値5.6km)における河道幅を500mごとに推定。



AMHG+McFLIにより, <u>現地観測データに頼らず, 衛星観測</u> <u>河道幅から</u>最適化アルゴリズムを用いて河川流量を推定.



- At-Many-station Hydraulic Geometry (AMHG)という近年発見された未知パラメータの少ない流量則を利用しました.
- ② 複数の河道断面において流量が保存される(McFLI)という仮定をAMHGに適用する ことで未知パラメータの数をさらに減らすことができ、パラメータ最適化アルゴリズムにより、 河川流量を推定することができます。
- ③ Bayesian AMHG-Manning(BAM)というベイズ推定を応用した最適化アルゴリズムを用いることで、不確実性を含む流量推定値を得ることが可能になります。

Global Hydrology Group / Yamazaki Lab

<u>結果</u>

・衛星観測流量は<u>観測と一致する流量変化の傾向</u>を示しました. ・灌漑が盛んな地域において, 流量の減少が確認されました.

→ 人間活動による流量の減少を捉えられることがわかりました.



河道幅の<u>季節変動が大きい河川において衛星観測流量の</u> <u>信頼性が高くなる</u>ことが明らかになりました。



<u>今後の展望</u>

全球水資源モデルH08への衛星観測流量のデータ同化スキームの構築により、観測情報を反映した取水量の推定を目指します.

河川洪水のインパクト予測 Impact-based forecasting of river flood



洪水の影響も含めて予測する

全球河川モデルとして世界200以上の研究機関で利用される (Yamazaki et al., 2011, 2012, 2013, and 2014)

本研究課題では、全球河川モデルの高度化により、全球的な汎用性がありながら地域レベルの洪水氾濫を高精度に解く手法を開発し、極端気象による洪水氾濫ハザードのリアルタイム確率的インパクト評価の実現を目指します。



極端気象災害が見込まれる際に 経済活動制限や広域避難といった 大規模対応の意思決定支援には、 雨量や河川流量などのハザード予測 に加え、氾濫発生による人的経済的 被害を含む災害影響予測が必要です。 (Impact-based forecasting)

大規模な災害対応は、経済機会損失も 含めて様々なトレードオフが発生する。 気象予測の不確実性も考慮して、災害 影響の包括的な確率予測が求められる。



河川氾濫ハザードの予測は、 降雨-流出-河道流下-氾濫のプロセスを 一体的に考慮して計算する必要があり、 豪雨や熱波などの気象災害より複雑です。

とくに、災害影響を見積もるには氾濫後の 浸水深分布の高精度予測が求められます。 河川氾濫シミュレーションの精度を担保する にはダムや堤防といった洪水防護設備まで を適切にモデルで表現する必要があります。



本研究では、河川洪水のインパクト評価に大きく影響する洪水防護を考慮した広域氾濫モデリングを実現し、 大量の気象アンサンブルを用いたリアルタイム洪水氾濫確率予測システムの構築を目指します。

地域ごとの洪水防護を考慮した洪水シミュレーションの実現



Global Hydrology Group/ Yamazaki Lab

Monitoring Surface Waters from Space 宇宙からの地表水モニタリング



Observing Surface Water from Space

--Satellite technology allow us to observe water surface changes--



1977 Figure 1: Landsort 1989 2006 2011 Figure 1: Landsat images taken over several years showing the drying up of the Aral Sea, once the fourth-largest lake now 10 percent of its original size (Nasa.gov, 2016). Landsat images showed the shrinking of Aral Sea by 90% in est lake is

decades. Observing water surface from space provides the ability to observe long term variations and provides lowcost method for monitoring water cycle

--Available Satellite Observations--

- Satellite remote sensing techniques provide a low-cost method for monitoring the various components of the terrestrial water cycle.
- Radar altimetry missions observe water levels in lakes, rivers, and floodplains along their orbits. Electromagnetic spectrum (visible, infrared, microwave, and their combinations) observe the
- extent and quality of surface water bodies. Gravimetry observe total terrestrial water storage Different remote sensing methods are available for observing different components of water cycle

Figure 2: Schem ation of main sensors/satellites observable variable The availability of remote sensing observations has aided improving the understanding of hydrological processes and their interactions

Assimilating Satellite Altimetry to improve River Discharge

--Estimating natural and human-

--Data assimilation framework for

induced terrestrial water dynamics-- continuous river discharge estimation--The overall aim is to transform the global hydrological

cycle studies, by fully integrating emerging satellite observations of the Earth

er and Lake monitorin





- Assimilate surface water observations from satellites into a global river/lake model.
- Build spatiotemporally continuous river flow, water depth, and inundation area.
- Combine land surface modeling with satellite observations of soil moisture and water storage changes
- Build a land-based hydrodynamic monitoring system for reservoir operations that cannot be observed directly from satellites

--Satellite altimetry

Satellite altimetry measures water surface elevation from space. Satellite altimetry can observe water surfaces directly unlike discharge with low uncertainty compared to inundation extent.



ure 4: Timeline of satellite altimetry mission

Global Hydrology Group / Yamazaki Lab



- Figure 4: Schematic representation of data assimilation framework Data assimilation method was developed to
- generate spatially and temporally continuous river discharge estimates.
- The CaMa-Flood global river model (Yamazaki et al.,2011) was used as a dynamics core.
- A physically-based adaptive empirical localization method to utilize as many observations as possible (Revel et al., 2019).
- The data assimilation algorithm was used to correct the initial condition of the next time step.
- The satellite altimetry was used as observations.



re 5: Example of generating empirical local patch

- Physically correlated river reaches were used to acquire observations for data assimilation
- Statistical methods have been used to develop the correlated area ('local patch') for the river network

because it supports diverse and dynamic environments around the world while also providing important benefits and services to human society and economic activities.

Terrestrial freshwater is a critical resource for terrestrial life, ecosystems, biodiversity, and human societies. Continental water is stored in reservoirs that are irregularly distributed among geophysical environments and climates. Surface water includes rivers, lakes, man-made reservoirs, wetlands, floodplains, and inundated. Those are especially important



--Global assimilation efficiency--

- Assimilation efficiency values were strongly influenced by the local state correction and the upstream inflow correction.
- Higher latitude rivers showed higher assimilation efficiency
- Continental-scale rivers also showed higher assimilation efficiency



Potential of data assimilation--



— Observations — Open loop — Assimimated
Figure 7: Potential of discharge estimation using data assimilation

- The data assimilation provides accurate and continuous river discharge
- The data assimilation method is successful in predicting secondary peaks in river discharge
- The data assimilation method is better in characterizing low flow in river discharge

--References--

Revel, M., Ikeshima, D., Yamazaki, D., & Kanae, S. (2021). A Framework for Estimating Global-Scale River Discharge by Assimilating Satellite Altimetry. Water Resources Research, 57(1), 1–34. https://doi.org/10.1029/2020WR027876

nazaki, D., Kanae, S., Kim, H., & Oki, T. (2011). A physically based description of floodplain inundation dynamics in a global river routing model. Water Resources Research, 47(4), 1–21. https://doi.org/10.1029/2010WR009726

統合評価モデルによるカーボン・プライシング政策の評価

Evaluation of carbon pricing policy through IAM

脱炭素社会に向けて:カーボン・プライシング政策と金融界での取り組み

カーボン・プライシング政策は、温室効果ガス排出量を削減し、温暖化抑制に有効とされています。

カーボン・プライシング政策(以下C・P政策)は、企業などの 排出する温室効果ガスに「炭素価格」をつけ、それによって排 出者の行動の変化を促す政策です。脱炭素を実現するため には今後高い炭素価格が求められます。2022年には、日本 でもC・P政策の基盤となる「GXリーグ」を設立するなど、今後 も世界中でC・P政策は広がると予想されています。





炭素価格の水準 NGFS (2022)

脱炭素技術への投資も地球温暖化の抑制に対して重要な役割を果たします。



TCFD (気候関連財務情報開示タスクフォース)、企業が自身に気 候変動が与える影響を投資家に開示するための枠組みが世界中 で広まっています。多くの企業はTCFDで求められるC・D政策の変 化など脱炭素社会へ移行する際に伴う「移行リスク」に対応するた めに気候変動の緩和に係る脱炭素技術への投資を進めています。

カーボン・プライシング政策と脱炭素技術投資の相互作用を経済モデルで考慮し、将来シナリオを分析 することで、経済発展と温暖化抑制を両立させる最適な政策を提案できるか?

TCFD上の「移行リスク」は将来のC・P政策の影響を受け、脱炭素技術投資にも影響すると考えられます。加えて、C・P政策による高い炭素 価格が技術投資への需要を促すことや企業が将来の炭素価格をどう見通すかで、投資の動きが変化することが考えられます。このように C・P政策と技術投資には密接な関係があり、互いの相互作用を考慮することでより効果的な気候政策の提言につながると期待されます。

統合評価モデルを用いたカーボン・プライシング政策と脱炭素技術投資の分析



Global Hydrology Group / Yamazaki Lab

全世界に広がる洪水の経済被害推定 **Global-Scale Assessment of Economic Losses by Flood**

温暖化で激化する洪水災害による経済被害

地震と並ぶ被害額を及ぼす大災害の一つです。

近年の研究で、温暖化の影響によって今後更に発生が増える

ことが予測されています。そのため、洪水による経済被害の正

確な将来予測が求められています。経済被害を精度良く予測

するためには、浸水エリアや人口を算出するだけでなく、資産・

経済活動への様々な影響を考慮する必要があります。

洪水は世界中での発生数が非常に多く

洪水による経済被害の計算は グローバルに行われる必要があります。

田口諒

平林 由希子

その理由は2つあります。 1. 洪水はどこでも起きる可能性があり、どの地域 でも使えるような計算の枠組みを作る必要がある

2. 現代社会では世界中の地域が経済的に結び 付いており経済被害は地域間を伝播していくため

UNDRR (2018)

自然災害の 種類別経済被害額



これまでの気候関連災害による 経済損害(黄)の推移



台風による他地域への経済被害伝播

高解像度洪水シミュレーションを用いた将来経済被害予測とその展望

山崎研究室では、全球河川モデルによる高精度洪水ハザード計算に、社会経済 データを組み合わせてグローバルな洪水リスク推計に取り組んでいます。



①<u>直接被害</u>:洪水により建物や資産が 破壊・汚染されることによる被害 ②<u>営業停止損失</u>:浸水期間中に経済活動が行えないことによる損失 ③サプライチェーン影響

□ 今まで考慮されることの少なかった 営業停止損失による経済被害 河川勾配の緩い地域で大きくなりやすい特徴 や被害の大きい地域ではGDPの約1%にまで損 害が上ることを示唆

□ 洪水防護策後の洪水リスク

各地域で費用便益が最大になる防護策を行った 場合に、防ぎ切れない洪水によるリスク(残留リス ク)を推定、インドや中国等では今後防護施設の建 設途中に受ける洪水被害が大きいことを示唆

今後の取り組み

洪水被害により、ある地域での生産 が停止すると、そこから仕入れていた 中間生産地での資材不足に繋がりま す。これにより、企業は調達場所の変 更を迫られ、全体の製造プロセス停 止による甚大な経済被害を被ります。



しかし、その取引ネットワークの複雑さ やデータ取得の難しさから、サプライ チェーンを通した洪水被害の実態を把 握出来ていません。ローカルな洪水被 害とグローバルな経済活動を繋げる社 会経済モデルや土地利用データを用い て、被害の推定に取り組んでいきます。

Global Hydrology Group/ Yamazaki Lab

洪水防護策施行後の残留リスク分布

60° W

洪水経済被害は①直接被害②営業停止損失

将来の営業機会損失による被害額の地域分布

60° N

30° N

30° S

60° S 180

120° W

③サプライチェーン影響の3つに分けて推計する

Taguchi et al.(2022)

et al.(2021)

120° E

60° E

http://hydro.iis.u-tokyo.ac.jp/ https://global-hydrodynamics.github.io

\geq



Water dynamics can shape land cover distribution at hillslope scale

Why at the hillslope scale?

Although the climatic altitude impact has been thoroughly studied, discussions over the <u>hillslope hydrology control</u> on the land cover are still lacking. At the hillslope scale, driven by gravity, water drains from ridge to valley, causing the water availability contrast between highland and lowland.

Water regulates vegetation growth

Vegetation growth can adapt to different levels of water availability. However, under extremely dry or humid conditions, the growing process will be greatly suppressed. This leads to the formation of some typical landscapes in the flat regions: <u>a clear boundary</u> exists between vegetation types in the highland and lowland.

Represent the heterogeneity in land surface model (LSM)

An accurate representation of the land cover heterogeneity in LSM is important. Although the conventional high-resolution approach can make accurate representation, it also <u>causes huge computation costs</u>. In this concern, a more computationally efficient manner is desired.



In the topographically flat regions, some typical landscapes are assumed to be formed by ridge-to-valley water flow.

An efficient method to represent the hillslope land cover heterogeneity

A method to efficiently represent hillslope impact on land cover heterogeneity in LSM

Based on the topographic data MERIT-DEM (Yamazaki et al., 2017), a unit-catchment can be evenly discretized into <u>10 height</u> <u>bands</u>, each band is represented by the dominant land cover type. The 10 height bands will be used to approximate the realistic land cover distribution.

How to find landscapes affected by hillslope water dynamics: an example of gallery forest

Using the above method, an effective representation of the hillslope land cover heterogeneity is shown in a flat unitcatchment. The lowland area is dominated by the tree ecosystem, whereas the highland area is dominated by the grass ecosystem. The landscape location is confirmed with the google static map.



Close view of a unit-catchment identified as gallery forest located in western Congo.

Global Hydrology Group / Yamazaki Lab



The realistic land cover distribution is represented by 10 height bands.

Search for the hillslope-affected landscapes at the global scale

Overall, the proposed method can accurately search the locations of 4 types of landscape in the world.

Global distribution of landscapes formed by hillslope effect



The number of locations differs among the 4 landscape types.

Future work

By applying the proposed hillslope method to the LSM, it is expected to simulate the land surface process almost as accurately as the conventional method. In addition to that, the new method is supposed to largely save the computational cost, which makes explicit land surface modeling possible at the continental or global scale.

Impact of Climate Change and Climate Variability on Extreme Flood

気候変化と気候内部変動の極端洪水への影響

Does climate internal variability affect extreme flood occurrence?

Flood risk will increase in the future due to global warming.

A large increase in flood frequency is projected in Southeast Asia, Peninsular India, eastern Africa and the northern half of the Andes.



Recently, many severe flood events have happened in the world, including Typhoon Hagibis in Japan.

Total rainfall by Typhoon Hagibis was 10% increased by global warming, according to climate/weather model simulations. [Kawase et al. 2021]



Extreme floods could be enhanced not only by climate change but also by climate internal variability.

Climate variability has a global impact on river flow and flooding. High SSTs play an important role in feeding moisture into storms, assisting in storm intensification and causing heavy rains and then severe flooding.[Trenberth et al. 2015]. South Asian countries, including Bangladesh, are highly vulnerable to floods caused by climate change and climate variability.



Climate change projection studies may not be able to properly determine under what conditions extreme floods may be enhanced. [Zhai et al. 2018]. In this context, attribution of climate change and climate variability impact on extreme flood occurrence may reveal when and how the risk of flooding increases.

Here, we qualitatively assess the climate change and climate variability impacts on extreme flood, using **large-ensemble climate simulation datasets**.

Assessing climate variability impact by large-ensemble climate simulation

<Method>

We used d4PDF large-ensemble climate simulation for attribution

d4PDF has large-ensemble data (60 years * 100 ensemble) to assess the occurrence probability of extreme events. d4PDF is usually used for attributing the impact of climate change, by comparing the historical and non-warming experiment.



Probability distribution by large ensembles enables to assess, for example, how much the occurrence probability of extreme heat wave is increased by climate change.

We found d4PDF was also used for investigating climate variability impact, especially those related to atmospheric response to the SST perturbations.

Sea surface temperature patterns (lower boundary condition of d4PDF) ¹⁵ are shared among all ensemble members and all scenarios. So that, El Nino and La Nina years are ¹⁴ consistent in all d4PDF simulations.



We compared the occurrence probability of extreme precipitation in El Nino years and La Nina years, and calculated how El Nino enhances the occurrence likelihood of Extreme precipitation events using FAR method.

Quantitatively assessment: Fraction of Attributable Risk (FAR) & its variation

FAR: Originally used to assess the anthropogenic influence on change of extreme events. (Stott et al., 2004)



Global Hydrology Group / Yamazaki Lab

<Result>

First, we assessed the occurrence probability change of extreme precipitation by severe typhoons in Japan regions.



change & ONI ≥ 0.5 can further intensify the risk of extreme precipitation. TimeONI <=0.5 -0.5 >=0.5 All ONI

Probability density of ONI index

FAR increased in El Nino years (ONI>0.5), suggesting extreme rainfall is more likely to occur.

Joint impact of climate change and El Nino is also suggested.

All ONI =0.5 1951-1970 -0.007 -0.542 -0.048 1971-1990 -0.394 0.32 1991-2010 -0.416 0.17 0.39 All Period -1.038 0.001 FAR to climate change: 20-year return period precipit tion all over Japa FAR for Climate Change in 1991-2010 EAR for ONI when $ONI \ge 0.5$ FAR for ONI+ Climate Change when ONI > 0.5 in 1991-2010 > 0.290 · In rev ecent years, climate change plays a larger role in the c red with ONI, while the impact of ONI is also non-negl

Positive ONI and climate change can increase the

likelihood of occurrence of extreme precipitation in

Japan, respectively. In recent years, climate change

plays a larger role, and the joint impact of climate

<Ongoing Study>

We are also assessing the impact of climate change and climate variability on large river flood, focusing on Ganges-Brahmaputra basin.

Is a large river flood more difficult to capture compared to precipitation?

Atmospheric processes can spawn heavy/extended precipitation with the potential for flooding, but much of the resulting impact is ultimately controlled by hydrological process [Frei et al. 2000].

For extreme precipitation analysis, the precipitation location and hazard location are the same for any basin.



For large river, the number of tributaries and their flowing timing into a river affects the likelihood of flood. The topographic features and size of the catchment play an essential role in tributary flow timing by affecting the various runoff components (surface and subsurface) and their timing. Moreover, precipitation Location and timing and river hazard location and timing are very different.

地球の河川のデジタルツイン Digital Twin of Earth's Rivers



デジタルツイン

CO²排出 (Wehrli. 2013)

地球上全ての河川をコンピューター上に再現

現実世界から収集した、全球の河川に 関するあらゆるデータを、まるで双子で あるかのように、コンピュータ上で再現。

基礎研究から社会実装まで、幅広い分野で役立てられています。

- 地下水動態解析
- 地表と気象や植生との相互作用の解明
- 水面からのCO²排出量の推定
- リアルタイム洪水シミュレーション など



変換

水域分布

水文標高

河道幅 etc. 分析•予測

水文地形データは、陸域の水循環モデリングの重要な基盤データ。

航空機観測などに基づく高 精度の標高データなどは先 進国のみで利用可能。世界 では衛星観測による地形・地 理データしか手に入らない地 域も多数存在。



衛星観測データには多 様な不確実性(ノイズ やバイアス等)が伴う。 洪水氾濫計算などのた めの補正が必要。

植生との相互作用 (Ying et al. 2019)

現実世界



山崎研究室は、複数のリモートセンシング/オープンデータ・統計手法を組み合わせ、 水循環シミュレーションに適用可能な、全球河川水文地形データ整備を推進しています。

世界最高水準の水文地形データの開発とそのインパクト

多様な衛星画像をベースとした世界で利用される水文地形データ



Global Hydrology Group / Yamazaki Lab



Rating-curve: a stable representation of river flow regimes

Simulating flood processes (e.g., discharge, water depth and inundation) is important for assessing flood hazard and risk, and guiding flood mitigation. River bathymetry (i.e., underwater river topography) is one fundamental parameter in flood models.

Accurate simulation of hydrodynamic models is instantaneously affected by errors in river bathymetry (i.e., riverbed elevation) and bias in runoff inputs.



Fia. Conventional method to measure river bathymetry (i.e., underwater river topography) Error in river bathymetry is static, while measuring large-scale accurate river bathymetry is not feasible

through in-situ or remote sensing techniques.



Fig. Comparison of model simulation and observation in time series with corrupted runoff (-50%, 0, +50%).

Bias in runoff is dynamic and varying in time and space and among models. It is unmeasurable and difficult to be eliminated.

We want to avoid simulation results are coincidentally right because of a combination of multiple wrong components!

Global river bathymetry is calculated with an empirical Power-law equation

 $H=a\;Q^b$ H: river channel depth; Q: climatological river discharge; a=0.1, b=0.5

Rating-Curve (stage-discharge relationship)



Fig. The rating-curve is stable regardless of runoff biases

Whether bias correction using rating-curve method can make the correction more robust and the river model performance more reasonable?

Robust estimation of river bathymetry with rating-curve method

··· METHODS ···

··· RESULTS ···

- The correction with RC-Method is efficient because corrected river 1.
- bathymetry well matches the virtual true river bathymetry. The correction with RC-Method is independent from the runoff bias/errors 2. because river bathymetry converge with different runoff inputs.





Fig. EXP1. Model performance against observations before Л, and after bias correction with corrupted runof



- 1. Correction of river bathymetry does not change much the river discharge simulation.
- 2. New method provide the most *reasonable* results (better result with better runoff).
- 3. The new method is robust (not sensitive) to runoff bias even after bias correction.

Limitations:

1)

- Relying on gauges with observations of WSE and discharge, while
- Relying on gauges with observations of whe data and applicability of the method is limited. Zhou, et al. (2022). Water Resources Research, doi: 10.1029/2021/W6031226 Contact: x.zhou@rainbow.iis.u-tokyo.ac.jp 2) The method is not well performed where backwater affects.
 - http://hydro.iis.u-tokyo.ac.jp/

Estimate bias at each virtual gauge 1. (with observations of WSE and discharge)



Fig. Calculation of the two bigs Time-series bias (TSB): bias of water surface elevation in time series Rating-curve Bias (RCB): bias of fitted rating curve

2. Correct bias at gauges and river sections between gauges with linear interpolation.



Fig. (a) Comparison of TSB and RCB at 20 gauges in the Amazon River Basin. (b) The bias along the rivers (by linearly interpolation)

3. Evaluate the model parameters/outputs with updated river bathymetry.

Experimental designs:

- EXP1: Corrupted runoff (-50%, -25%, 0, 25%, 50%)
- EXP2: Multi-model runoff (Earth2Observe members)
- EXP3: Observing system simulation experiments (OSSEs, Assumed river bathymetry + Exp2)

Nighttime light data has the potential of detecting flood impact

Flooding has huge impact on human daily life. Gathering flood impact information on human daily life with appropriate accuracy and high efficiency on global scale is still a challenge.



Flooding can lead to **economic loss and fatalities** which is related to **human daily life**. Understanding such impact **globally** can support **international decision making** on land use, climate change and disaster relief policies.

Previous commonly used methods for assessing flooding impact have their own shortcomings. Global flood risk models are not able to estimate indirect impact out of inundation area. Flood damage models need much **auxiliary** input data and are with **low robustness** on global scale. Meanwhile, the models' results are simulation impacts which may have difference with realistic ones. The local manual investigation and global database need huge amount of time and manual work, which in hence are with **low efficiency** and **accuracy**.



Nighttime light (NTL) remote sensing data provide a unique observation of human activities which can be used for global flood impact assessment.

NTL data records nocturnal artificial light on the Earth's surface. A highquality global NTL product has been generated by excluding most uncertainties, with a high temporal (daily) and spatial resolution (500m) from 2012 till now. The data can be access easily with about only 10 days' delay.



When flooding happens, many places will face power outages or business interruption. Light intensity will probably decrease compared to normal status, which makes it possible for NTL data to detect flood impact. Compared with other daytime remote sensing data such as optical Landsat or SAR data, NTL is more related to impact on human daily life such as displacement or economic loss.



This study aims to use NTL to assess flood impact on human daily life globally, which can provide a better understanding on how human being affected by flooding.

Flood impact information from NTL

Method:

We aim to evaluate the **potential** of NTL to **detect flood impact** and utilize this data to assess flood impact **on global scale**.

- Dataset: NPP/VIIRS Black Marble VNP46A2 NTL product (500m, daily) Dartmouth Flood Observational database (DFO for short) records historical flooding cases with information from news.
- 4 indices were set to represent flood impact from NTL: Decrease degree (DD) = (NTL_{normal} – NTL_i)/std_{normal} Serious level (S) = max(DD)
 Affect: DD > 1 pixels are affected ones
 Duration: time period of being affected

Further Lawsple of impact layers from NTL for one event in Argentina in 2013(DFO ID: 2014).

NTL can detect flood impact and provide detailed information including light intensity of normal status and during flooding period, affected location and duration, serious level as well as data availability during flooding period.

Global Hydrology Group/ Yamazaki Lab

Serious level of impact are different among cases, which may be related to the serious level of flooding and the local defense ability.



Figure 2 Serious level (S) from NTL for 99 cases recorded in DFO database in 2013.

(a-1) (b-1) (a-2) (b-2) (b-2) (b-2) (c-2) (c-2)(

Figure 3 Light intensity of urban area (a) and flood affected location for MODIS inundation (b) and NTL (c) for 2 cases recorded in DFO (case1: id 4083, China, 2013; case2: id 4098, India, 2013).

NTL impact information is related to fatalities which reflects the impact on human. DFO database's given duration is that of inundation rather than human life being affected. NTL has the potential to fill this gap. Both the **location** and **duration** are of large **difference** from **NTL** and MODIS **inundation**. NTL focus on **urban area** which is better to reflect the impact on **human daily life.**

Table 1. Correlation coefficients for NTL and inundation impact information with database's given properties for 99 cases in 2012

given properties for 99 cases in 2013.			
R^2	NTL DA	NTL Duration	Inundation Duration
DFO duration	0.023	0.007	<u>0.694</u>
DFO fatalitie	<u>0.108</u>	<u>0.159</u>	0.070

: Significant p<0.05

運河網の水文モデルへの実装 Aqueducts in a hydrological model



全球水文モデルを用いた水資源量評価

気候変動によって世界の多くの地域で水ストレスが増加

今後気温が2度上昇すると、深刻な干ばつなどにより水不足を経験する人口が8~30億人に及ぶと予測されています。

全球水文モデルを用いて利用可能な水資源の量を評価

降雨や河川、地下水など自然の水循環と、灌漑やダムなど人間活動との影響を踏まえて、利用可能な水資源が十分存在するかを評価することができます。 全球に適用できるモデルを使うことで、広範囲にわたる気候変動の影響を組み込んだ推定ができ、途上国など河川水位などの観測データが不十分な地域でも気候の情報からある程度シミュレーションが可能であるなどのメリットがあります。





モデル上に配置した 取水堰と灌漑地

地域レベルの気候変動対策には、より高解像度の水資源量評価が必要

全球水文モデルの計算結果から対象地域の範囲のみを取り出し、空間解像度約2km~10kmの計算が行われています。





【手法】全球水文モデルの一つであるH08を用いて、インダス川流域を対象に 運河網の効果を考慮した水資源量の評価をしました。



Satellite-based global hydrodynamics modeling considering reservoir operations



衛星データを用いた全球河川水動態モデルにおける貯水池スキームの向上に関する研究

Satellite data has a potential to revolutionize reservoir monitoring and modeling

Reservoir monitoring and modeling are indispensable prerequisites for advancing our understanding of their impacts on river hydrodynamics and effective water resources management. Actual rivers are not natural rivers
Reservoirs are important natural resources



Fig. 1: Connectivity status index of the world's river reaches (Grill, Lehner et al. 2019, Nature).

Satellite data provide observation of reservoirs



reservoir water areas and levels

Many parts of world's rivers are now dammed because of an unprecedented surge in global dam construction. Dams impede the flow of essential nutrients, influencing downstream terrestrial and coastal environments. Reservoirs regulate peak flows and hydraulic residence time to mitigate flooding. Reservoirs can also become hotspots for greenhouse gas emission.

Understanding the "real river hydrodynamics" needs to consider the influences of dam construction and management practices.





Flood Control Environmental flow Agricultural water (30–40% of irrigation water globally) Domestic water Industrial Water Power Generation

(16.6% of the world's

electricity)

Fig. 2: Dams and reservoirs are proliferating worldwide because of their manifold societal benefits.

Model can consider reservoir impacts



Fig. 3: The schematic diagram of the reservoir modeling approach in the CaMa-Flood model. The current scheme is used for flood control.

Current research gap

- The accuracy and resolution of satellite data are inadequate. Previous studies mainly focused on large reservoirs, highlighting the ongoing need for comprehensive and high-quality satellite-based reservoir data.
- Model simulations have large biases primarily caused by the limited observations for calibration and the complex nature of reservoir operations.

We try to fully utilize satellite-based reservoir monitoring in global river hydrodynamics model for more realistic hydrological simulations.

Integrating satellite data into the CaMa-Flood river hydrodynamic model

New data set, Res-CN

Reservoirs collects water and materials from their upstream. Upstream catchment attributes (see Fig. 3) affect water balance and water quality of a reservoir. These catchment-level data are of great value to support a wide range of applications and disciplines. However, no dataset exists for reservoir-catchment characteristics.

Key point 1: a first known effort to construct catchment-level characteristics of reservoirs in China.

Catchment-level data in six categories:

- Catchment body characteristics
- Topography
- Climate data
- Land cover
- Soil & Geology
- Anthropogenic activity characteristics

Fig. 3: Illustration of the datasets provided in our Res-CN.

Key point 2: a comprehensive and extensive reservoir data set on water level (data available for 20% of 3,254 reservoirs), water area (99%), storage anomaly (92%), and evaporation (98%).



You can freely access to all my Python/GEE/R codes to reproduce this work (data).

New dam module Reservoirs experience emptying and filling water seasonally. Lc is often fluctuating that is higher around the dry season to store water for irrigation and is lower in the wet season to create more space for flood control. Thus, a dynamic storage-release relationship aligns more closely



Fig. 6: The schematic diagram of the new dam module. The reservoir has three storage zones, in each zone, a specific storage-release relationship is determined.

Simulation results





Future works:

We are trying to assimilate satellite-based reservoir data, e.g., storage and water level, into the CaMa-Flood.









Global Hydrology Group / Global Hydrodynamics Lab / Yamazaki Lab (山崎研)